

## 令和2年度第2回前近代小部会 次第

日 時 令和3年1月6日(水) 15:00～

場 所 北海道庁別館 9階 第1研修室

(リモート開催)

### 1 開 会

### 2 議 事

(1) 北海道史・アイヌ史の時代区分論をめぐって

(2) その他

- ・令和2年度北海道史編さん委員会の開催
- ・『北海道現代史』資料編収録要領
- ・『北海道史年表』増補改訂作業とデジタル公開
- ・「北海道史への扉」第2号の構成
- ・資料調査について

### 3 閉 会

令和2年度第2回前近代小部会 出席者名簿

【委員】

(五十音順、敬称略)

役職	所属・役職	氏名	備考
小部会長	北海道大学大学院文学研究院 教授	谷本 晃久	リモート
調査研究委員	札幌大学地域共創学群 教授	川上 淳	リモート
調査研究委員	札幌国際大学 縄文世界遺産研究室 室長	越田賢一郎	リモート
調査研究委員	北海道大学アイヌ・先住民研究センター准 教授	蓑島 栄紀	リモート
調査研究協力委員	北海道教育庁文化財・博物館課 主査	中田 裕香	リモート
調査研究協力委員	藤女子大学文学部 准教授	松本あづさ	リモート

【事務局】

所属・役職	氏名	備考
北海道総務部行政局文書課道史編さん室 室長	靄原美恵子	
同上 主幹	杉本 正和	
同上 主査	伊藤 聡	
同上 主任	和田 直樹	

# 北海道史・アイヌ史の時代区分論をめぐって

## —いくつかの論点—

谷本 晃久

### 1. 前近代の北海道史を考える際の論点

### 2. 『新北海道史』通説編 1 (1970) における「先史」と「歴史」(表①)

\* 松前藩成立以前→松前藩→第 1 次幕領期→松前藩復領期→第 2 次幕領期→開拓使前後→三県一局…

↑ 「先史時代」→「アイヌ」→「和人の渡道」→「安東氏」→「蝦夷島の乱と蠣崎氏の台頭」

《歴史時代：和文文献による叙述、「日本史」の北漸過程を叙述》

《アイヌ文化：歴史時代並行期に「先史文化」が継続、と認識》

### 3. その前提となつたとみなされる研究状況

\* 考古学における「アイヌ文化」

大場利夫 (1913~2007) による「アイヌ文化」の定義 (『北海道の先史文化』1973 年)

- ・「アイヌ文化は、近世において大陸及び本州からの外来文化を強く受けて、潤色されたのであるが、基本的には擦文文化の伝統を、中核としているということが出来る」
- ・「(北海道では先史文化である擦文文化とオホーツク文化が) 次第に消滅していったが、自然採集経済の段階に足踏みしていた北海道では、そのまま原始的な、いわゆるアイヌ文化期に変遷移行して、比較的近代までこの状態がつづいた」
- ・「原始文化が、更に近代までアイヌ文化として残存した」
- ・「北海道の先史文化は、近世までアイヌ文化として残存していた」

河野広道「北海道の先史文化」(米村喜男衛編『北海道先史学十二講』1949 年)

「八百——八十年前の時代は、北海道の原始文化が日本の北上文化により潰滅に瀕する過程を示すものであり、明治の始めまでに北海道全体が歴史時代の段階に入る」

後藤寿一「北海道の先史文化についての所見」(『考古学雑誌』24-11、1932 年)

「かくして古代に於ける文化の名残は、今僅かに生存する少数の人々によって微かに象を止むるに過ぎない」

\* 福澤諭吉の対アイヌ観：1882 年

「…北海道の土人の子を養て之に文を学ばしめ、時を費し財を捐て、辛苦教導するも其成業の後に至り我慶応義塾上等の教員たる可からざるや明なり。蓋し本人に罪なし、祖先以来精神を練磨したることなくして遺伝の智徳に乏しければなり」

「今我輩が聊か洋書を読んで物理を談じ、苟も洋学者を以て自ら居るも、独り我輩始造の力に非ず、数十百年の以前より我祖先が書を読み理を推究するの力を我輩に伝へたるものにして、先人は縦行の書を読み我輩は横行の文を学び、唯縦横の別あるのみ、其能力の実は之を先人の恩賜と云はざるを

得ざるなり」

(福澤「遺伝之能力」明治15年(1882)3月25日付『時事新報』／『福澤諭吉全集』第8巻、58頁)

#### 4. 『新北海道史』以降の時代区分の試みをめぐって

- ・1980年代以降のいくつかの試みの例(表②)
- ・近年の文献史学による時代区分の試み
  - ▶ アイヌ史的古代 蓑島栄紀 2014 の定義 : 3世紀～13世紀
  - ▶ アイヌ史的中世 中村和之 2014 の定義 : 14世紀～18世紀
  - ▶ アイヌ史的近世 谷本 2015 の定義 : 17世紀～1875年
  - ▶ アイヌ史的現代(近代) 佐々木利和 1995 の定義 : 1868年～

おわりに

# 表①

第一編 松前藩成立まで

★小規は測定資料の採取に誤りがあつたように思われる。  
 ★★本例は火山灰の堆積をもとに決定したものである。

相対的(推定)年代 A, B, D, C.		先史文化の年代	実年代 (放射性炭素の測定による) B, P.
B, C, 五〇〇?	先土器文化 石刃文化 細石刃文化 石刃鎌文化	先史文化の年代	一五、八〇〇±四〇〇、一四、八〇〇±三三〇、一五、八〇〇±三八〇(白滝) 一〇、〇〇〇 七、一〇〇±二一五(湧別) 七、六八〇±二〇〇、七、七〇〇±二〇〇(虎杖浜) 六、七九五±一五〇、五、六二〇±一〇〇(大曲) 七、一三〇±二二〇(東釧路) 六、八〇〇±二二五(美里) 五、一九〇±七〇(虎杖浜) 三、八〇〇±一四〇、四、五〇〇±二四〇(美々) 四、一五〇±四〇〇(常呂) 三、九五〇±一〇〇(根室)
B, C, 〇年	縄文文化 前期 中期 後期 晩期	縄文文化	三、八二五±一七五(富川) 三、九五〇±二〇〇(谷口) 三、二三〇±一六〇(植苗) 二、四五〇±二二〇、二、四四〇±二二〇(室蘭)
A, D, 五〇〇?	続縄文文化	続縄文文化	一、八七〇±二〇〇、一、九二〇±二三〇、一、九五〇±二二〇(余市フゴツベ) 一、九九〇±八〇(礼文華) 一、八八〇±八〇、二、〇四〇±一〇〇(恵山) 三、七五±九〇(小幌)★
A, D, 一〇〇〇?	擦文文化 オホーツク文化 擦文文化	擦文文化	一、一〇〇±一六〇(長部)、九二〇±二〇〇(築別)、一、五二〇±六五(恵庭) 一、六一〇±一〇〇、一、〇七〇±八〇(栄浦)、一、二二五±八五(千歳) 八九〇±一〇八、九〇〇±二〇(根室) 八二〇±九〇(礼文華) 一、四二〇±一七〇(ウトロ)、一、三二〇±二二〇(羅臼) 九九〇±一四〇(常呂) 一、五二〇±七〇(宗谷)
	アイヌ文化 (歴史時代)	アイヌ文化	五四五±九〇(夷王山) (二九九(苫小牧……丸木舟)★★

土器の相対年代と実年代との対比  
 (B, C, 年代はその数に一九五〇を十すれば B, P, 年代になり、A, D, 年代は一九五〇よりその数を十すれば、B, P, 年代になる)。

土器の相対的編年

『新北海道史』第2巻通説1, 1972年

# 表②

西暦(年)	①和人支配の変遷 〔新撰北海道史〕 (1937)	②高倉によるアイヌ政策の変遷 (1942)	③佐々木による時代区分 (1982,1995)	④河野による時代区分 (1996)	⑤宇田川による考古学編年 (2001)
1200-	平安時代	上古より平安に至る	前アイヌ文化期		
1300-	鎌倉時代		アイヌ文化前期	前近代古層期	擦文時代
1400-		安東氏時代		終末期 (晩期前並立関係期)	内耳土器時代
1500-	室町時代		大闘争時代 (ユーカラの時代)	開始期 (前期局地对立関係期)	
1600-	桃山時代		蝦夷地の平和時代 (アイヌ和人拮抗時代)	前近代変容期 (中期局地妥協関係期)	原アイヌ文化中期
1700-	江戸時代	前松前藩治時代	諸豪勇時代 (ウエベケレの時代)	展開期 (後期前アキナイバ関係期)	原アイヌ文化後期
1800-		前幕領時代	役蝦夷の時代	後期 (後アキナイバシヨ関係期)	
		後松前氏時代		後期 (カイシヨバシヨ関係期)	新アイヌ文化
		後幕領時代		終末期	
1900-	近代	開拓使及其前後	現代アイヌ史的	近現代	
		北海道庁時代	「植民地的性質」の終わり		

図1 「アイヌ史」の時代区分

谷本晃久「近世の郵政史」(岩波講座『日本歴史』第13巻、岩波書店、2015年/初出2004年)

2021/01/06

北海道史編さん委前近代史小部会

## 北海道史・アイヌ史の時代区分論をめぐって—先行する試みの論点整理

蓑島栄紀

過去の学説が、どのような意識のもとに前近代の北海道史、アイヌ史の流れを描いているか、いくつかの学説を取り上げて紹介

とくに、キーワードのひとつとして、アイヌの精神文化や口承文学にも着目

○知里真志保 1953-1954「ユーカラの人々とその生活—北海道の先史時代人の生活に関する文化史的考察」『歴史家』2、3（のち同 1973『知里真志保著作集』3、平凡社に再録）

・「アイヌ文学」の形態分類

「韻文物語（詞曲）」 神のユーカラ（神謡） カムイユカル （一）

オイナ （二）

人間のユーカラ（英雄詞曲） （三）

「散文物語（酋長談）」 （四）

※知里において、上記（一）～（四）は、物語の形態分類の意味だけでなく、アイヌ史を反映するものとして認識される

→「従来は単にアイヌ文学の種類として平面的に分類されていたにすぎない「カムイユカル」「オイナ」「ユーカラ」「ウエベケレ」などが、それぞれ時代の社会の発展に応じる特別な形態として、歴史的な意味を新しく持つてくるようになるのであります。」

・「第一のカムイユカル」（神謡） ←折口・金田一の「託宣」論踏襲？

→植物や器物も物語の主人公。とくに多いのは動物神。それらは「人間でありながら、同時に動物でもあるわけであります」

→「カムイユカルは、人間が或る特定の動物と親類であると考えた、いわゆるトーテミズムの社会、一原始共産制の行われている血族的な小集団の社会を背景に生れた物語であろうか、と一応考えられるのであります」

・「第二に挙げたオイナ」

→「主人公が自然神から人格神に変わる」「物語の内容もがらりと変って来」る。

→「このような人格神の観念が発生するためには、集団社会の中で階級の分化が生じて、支配する者と支配される者が区別され、その中から強い個性が自覚されて来なければならないのであります。また生産様式に於ても、自然の力に対する人間の力の優越が、多少なりとも自覚されて来なければならないのであります。」

→「オイナの主人公であるアイヌラックルは、(略) 事実は原始社会におけるシャーマンであり、同時にまた酋長でもあった」

→「オイナを産んだ背景の社会としては、このようなシャーマン酋長の支配するところの、シャマニズムの爛熟した社会が考えられるのであって、それはある考古学者が主張するような、部族的大酋長のもとに原始的な焼畑農業などの行われていた社会であったかもしれない」

・「第三の、人間の英雄を主人公とする、いわゆるユーカラ（英雄詞曲）」

→「北海道を本拠とするヤウンクル（「内陸人」「本州人」「北海道本島人」と、大陸の方から海を越えてやって来て、北海道の日本海岸の中部からオホーツク海岸の各地に橋頭保を確保して住んでいたレプンクル（渡来の異民族）との民族的な抗争の物語」

→「レプンクル」はオホーツク文化。それが栄えたのは「今から凡そ千三百年から八百年ぐらい前までの約五百年間と見られております」

・「大陸の方から押しかけて来た渡来の異民族と戦うために、北海道根生いの民族は、各地の酋長を集めて族長会議をやっております。この頃はもう部落部落が孤立していたのではなく、異民族の侵入に対して、本島の連中は一致団結して部落連合というようなものを作り、総指揮者を立てて戦っているのであります。そしてそのような共通の敵に対する団結を通して、同族意識を高揚し、自覚し、そこに後世のアイヌという一つの民族を形成する地盤が作られていくのであります。」

・「第四の散文の物語（酋長談） ウエベケレ トウイタク

→「内容は部落の首領の体験談」

→「ユーカラでは、人間の英雄が主人公であって、それは人間と意識されてはおりますが、半神的超人であり、「まだ完全に人間になりきってはおりません。」

→「ところが、ウエベケレに出て来る主人公は、もう完全に部落の酋長とその部下であり、松前交易にも出かけて行くのであります。(略) その時代は江戸の中期から末期へかけての、実在のアイヌ部落とその酋長の物語なのであります。」

#### ○桜井清彦 1967『アイヌ秘史』

・「古代のアイヌ」「中世のアイヌ」「近世のアイヌ」「近代のアイヌ」

→画期：鎌倉時代、江戸時代（家康黒印状）、明治維新→日本史年表を基準

・「古代のアイヌ」の章に「続縄文文化」「擦文文化」「オホーツク文化」の項をたて、「続縄文文化」を「アイヌ史の出発点」とする。「米作に適しなかった」、米作の東漸において「後進地帯になった」

・カマド等住居構造、「本州文化がいかに強力に影響したかがうかがえよう」

・神聖記号：「どうやら擦文文化とアイヌ文化の間には連続がみられるようだ。もちろん、



擦文文化がそのままの形でアイヌ文化へと展開したわけではない。本州からの影響とともに北方大陸からも強い影響があったにちがいない。」

○宇田川洋 1980『アイヌ考古学』（増補復刻、2000『増補 アイヌ考古学』）

- ・「中世考古学」と「近世考古学」を提唱。
- ・「50年ほど前、駒井和愛氏は“アイヌ考古学”というものを考えておられたようである。擦文文化の研究に対して狭義にアイヌ考古学をいっているようであるが、擦文文化終焉以降の本州の中世・近世に相当する北海道の考古学に関してその名を冠するように拡大解釈するように提唱したく考える」
- ・「1中世のアイヌ考古学」の第一に「内耳土器をもつ文化」をあげ、「2チャシ文化の概念」の副題を「近世考古学の実践」とする  
→おおまかに「内耳土器文化」=中世、「チャシ文化」=近世とするアイデアを提示

※18頁の年表（右図1）。13世紀後半～17世紀を「内耳土器文化」、16世紀～19世紀を「チャシ文化」とする

	本 州	北 海 道
20	明治	明 治
19		江 戸
18	江戸	チャシ文化
17	戦国	チャシ文化 (アイヌ文化)
16		
15	室町	内耳土器文化
14		
13	鎌倉	
12		
11	平安	擦 文 文 化 オホーツク文化
10		
9		
8	奈良	
世紀		

図1 8世紀以降の文化対比

- ・「チャシ文化」「チャシ文化時代」：「藤本英夫氏によって提唱された言葉」
- ※「考古学では、擦文文化の終末期が未確定である。擦文文化の終末とチャシ構築の始まりがダブルかどうかは別であるが、チャシ構築に年代幅が考えられるところから、仮定として、“チャシ文化時代”を設ければ、北海道史のミッシングリンクにアプローチするのに都合がいいかも知れない（藤本英夫 1977「チャシについて」『アイヌ文化』3）。

○佐々木利和 1995「歴史としてのアイヌ文化期」『アイヌの工芸 日本の美術 354』至文堂

- ・古アイヌ文化期（考古学的古代、文献史的古代）
- ・前アイヌ文化期（8世紀後半ころから13世紀ころ）
- ・アイヌ文化前期（13世紀ころから15世紀半ば）
- ・アイヌ文化後期（15世紀半ばから19世紀半ば）
- ・アイヌ史的現代（1868年以後）

※佐々木利和 1982「近世北方民族の生活」『アイヌと古代日本』では、「アイヌ文化前期・後期」をさらに細分（後述）

「古アイヌ文化期のうち考古学的古代は、縄文時代、続縄文時代といった先史時代で、文献史的古代というのはえみし（蝦夷）と呼称されていた時期を中心とする」

「前アイヌ文化期はオホーツク文化と擦文文化期で、アイヌ文化直前の、そしてアイヌ文化形成に大きな影響をあたえた時期をいう」

「前アイヌ文化期が終了するおおよそ 13 世紀ころから 19 世紀半ばにかけてがアイヌ文化期である」

「そしてその後、アイヌ文化が大きく変容するアイヌ史的現代という流れを考える」

「日本史の古代・中世・近世・近代・現代という時代区分や旧石器、縄文、続縄文、オホーツク・擦文、近世アイヌという北海道考古学の編年ではなぜいけないのか」

「やはりその民族の特性を充分にいかした時代区分が必要なのである。そうでないと、アイヌの歴史はいつまでたっても日本史や北海道史の枠内から離れることはできない」

「将来的にはアイヌの歴史の時代区分には古代・中世など 5 つの時代が必要かとか、アイヌの近代や現代はどうとらえるのかとか、アイヌ文化史や社会史、政治史との関連はどうするかなどという議論がおこなわれるはずである」

「アイヌ文化期は、考古学でいう「近世アイヌ」の時期であり、日本史の中世ないし近世と併行する時代でもある。この時期は前代をうけて、アイヌ文化の形成期ともいえるアイヌ文化前期とその成熟期であるアイヌ文化後期にわけてみるのがいいかもしれない。その場合、画期となるのは 15 世紀半ばの「コシャマインの戦争」であろうか」

「この年（1868）をもって日本史では近代の開始とするが、アイヌにとっては近代でもなければ現代でもない。いわばアイヌ史的現代がはじまるとみてもいい」

（※）佐々木 1982 による「アイヌ文化」期の細分

（一）ユーカラの時代（大闘争時代） 1456 年前後～1536 年ごろ

（二）蝦夷地の平和時代（アイヌ和人拮抗時代） 1536 年前後～1643 年ごろ

（三）ウェベケレの時代（諸豪勇時代） 1643 年前後～1789 年ごろ

（四）役蝦夷の時代 1789 年前後～1871 年ごろ

⇒「二つの大闘争時代」の指摘

・（一）が「第一次闘争時代」、コシャマインの戦い（1456-57）から、ショヤコウジ兄弟の蜂起（1515）、タナサカシの蜂起（1529）、タリコナの蜂起（1536）まで

→「蝦夷地における主導権の確立をめぐる闘争」「アイヌと和人は対等か、もしくはそれに近い関係にあった」

→「アイヌ・ユーカラ（英雄の詞曲）の主要モチーフはこの大闘争時代に求められる」

・（二）が、1551 頃の「夷狄之商舶往還之法度」に代表される「平和」「安定」期

・（三）が「第二次闘争時代」、シャクシャインの戦い（1669）の前史からクナシリ・メナシ

の戦い (1789) まで

- 「蝦夷地の事実上の支配権はすでに和人の手に帰しており、もはやアイヌと和人とは対等の存在ではない」
- 「和人の絶対的優位が確立していく過程にあって、その中でなお和人と対等、あるいは対等たらんとしたアイヌの指導者が多く輩出し、あるものは反和人軍の首領として、あるものは和人に対して毅然たる態度を失わず、アイヌとして誇りを持ち続けていた諸豪勇が各地に割拠した時代」
- 「こうした諸豪勇たちは「酋長譚」とも訳されるウエペケレの主人公」
- ・(四) は、場所内の統合者として、アイヌの意志とかかわりなく和人が使い易いものを「役蝦夷」(惣乙名、乙名)として選び出す時代 すでに力関係が固定化

○河野本道 1996『アイヌ史／概説』北海道出版企画センター

- ・前近代先古層期 (約 2 万数千年前～約 9000 年前) ※旧石器時代
- ・前近代古層期 (約 9000 年前～1400 年代前半中の半ば過ぎ) ※縄文～道南十二館?
  - 古層期開始期 (約 9000 年前～約 7000 年前) ※縄文早期
  - 古層期第 I 展開期 (約 7000 年前～約 4000 年前) ※縄文前期・中期
  - 古層期第 II 展開期 (約 4000 年前～約 2000 年前) ※縄文後期・晩期
  - 古層期第 III 展開期 (約 2000 年前～約 1200 年前) ※続縄文文化期
    - = 〈北海道島風文化域〉の誕生 〈アイヌ文様〉の起源 morew, ayush
  - 古層期終末期 (約 1200 年前～1400 年代前半中の半ば過ぎ) ※擦文文化期
    - = 〈続北海道島風文化〉(〈半異風文化期〉)
    - 〈オホーツク風文化〉
- ・前近代変容期 (1400 年代前半中の半ば過ぎ～1899) ※道南十二館～旧土法
- ・近現代 (1899～) ※旧土法～

「このような見方ができるとすれば、〈北海道島風文化〉(※続縄文文化)の担い手が〈アイヌ〉の範囲に含まれて当然と言えよう。」(p51)

「もし他からの影響があまり強くない〈アイヌ文化〉(略)を求めるとしたら、まだ〈半異風文化期〉(〈続北海道島風文化期〉(※擦文文化期))を迎えていないこの時期まで遡る必要がある。」

「以上のことから〈続北海道島風文化〉(〈擦文文化複合〉)を、「アイヌ文化」の範疇に含んで、「アイヌ文化」の一時期のあり方と見なし、この文化複合域をこの時期の「アイヌ文化」域の中央域として見ることができる」(p79)

「〈オホーツク風文化〉もまた地域的に「アイヌ文化」を担っている」

「北側の古来民であるアイヌ諸集団」「北海道島域の古来民であるアイヌ諸集団」(p83)

○宇田川洋 2001『アイヌ考古学研究・序論』

・時代区分 (I-1 考古学から見たアイヌ文化の展望)

※5頁の年表(右図2):「擦文時代」の次、1300年頃~1800年頃までを「原アイヌ文化」とし、さらに「内耳土器時代」と「チャシ時代」に区分

・「アイヌ文化」の三つの段階 (p16、36)

前期: 擦文文化終焉後の14~15世紀

中期: 16世紀前後

後期: 17~18世紀ころ

→この段階までが「原アイヌ文化」

→その後、「変容を迫られつつも現在まで続いている段階」=「新アイヌ文化」

・「アイヌ文化」と内耳土器文化、チャシ文化

①14~15世紀: を中心に「内耳土器文化」が盛行=「前期アイヌ文化」

※壕や土塁、テラスをもたない、伝承、地名のみの「カムイチャシ」の時代

②16世紀: 壕などを有する「実在のチャシ」。

中期チャシ文化=「中期アイヌ文化」

③17~18世紀: 多く戦闘用に使用。「後期チャシ文化」=「後期アイヌ文化」

→16世紀までの「前期チャシ」と「17~18世紀」の「後期チャシ」を対比。とくに後者において砦の機能の強化、敵に対する「民族的自集団意識」の高揚 (p43)

→15世紀中葉、コシャマインの戦いのころ、エスニック・アイデンティティの確立

→「これはチャシの機能の質的な転換を伴って、さらに17世紀以降の後期チャシの発達となってきたのであろう。まさに、アイヌ族あるいはその「民族文化」としての一つのエスニック・アイデンティティの確立をここに見ることができるのである。」(p44)

→その基盤に「アイヌ文化を支える三つの側面」 流通経済的側面、社会的側面、宗教的側面=「アイヌ文化複合体」(渡辺仁説の発展的継承)

→「とくにアイヌ社会で重要な基盤となっている要素として挙げられるべきものは、精神的側面いい換えれば宗教的側面であろう。このようにして、アイヌ族の独自の「民族文化

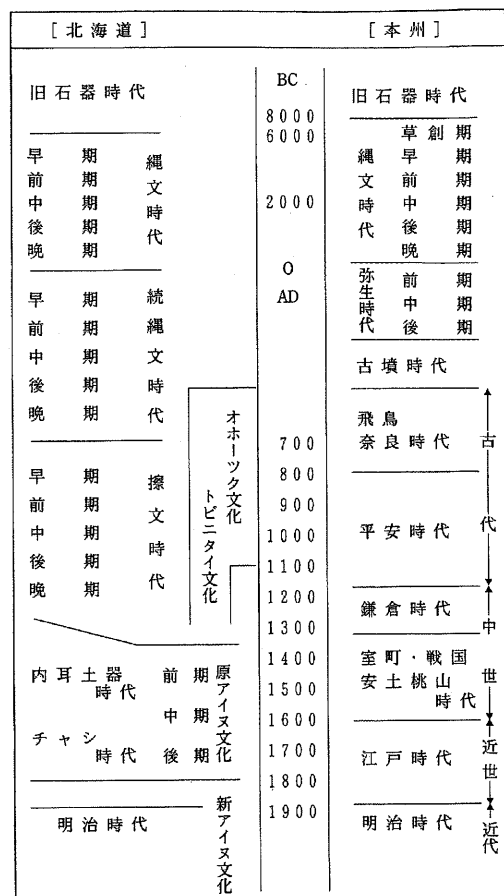


図2 考古学の時代区分

化」の論理と価値を認めることができるのである。」(p44)

→「アイヌ文化複合体」の源流は擦文文化あるいはオホーツク文化

→「社会的基盤は擦文文化に、精神的基盤はオホーツク文化に置いていた感が強い」

→「いわゆる近世的なアイヌ文化や社会は、その分布領域から考えて、基本的には擦文期の社会や文化を土台としながら、12世紀を前後するころに擦文文化がオホーツク文化を吸収し、その過程で、オホーツク文化から動物信仰などを自己の文化に取り入れ、かつそれを自己の伝統的な社会経済的基盤に合うように再編成しつつ、また他方で、和産物の多量の移入と、その日常生活での定着を媒介としながら、擦文期のそれとは異なった新たなものとして再編成する形で成立した、と理解することができよう。したがって、中世段階のアイヌ社会は、こうした文化の形成へ向かって急速に進みつつあったところの激動期の社会であったといえることができる」(p40)

・擦文文化からアイヌ文化へ

…「擦文文化からアイヌ文化への変遷過程は、竪穴住居から平地住居へ、すなわちカマドから炉へ、そしてそれに伴って甕形土器から内耳をもつ鍋へ、という図式でとらえることができそうである」(p20)

→擦文土器文化の終焉＝「容器革命」における「十三湊の役割」：「脱土器文化という歴史変革をもたらした」(p30-31)

…「このような火の神を大切にする考えはいつごろ確立したのであろうか。(略)例えばアイヌ文化の前段階の擦文文化の時代については、前出の竪穴住居のカマドがそれを考えるヒントを与えてくれる」(p18)

→擦文住居のカマドは、本州(北向き)と異なり、圧倒的に多くが東から南の方位に設置

→火の神が東方のハルニレから生じた＝アイヌの国土創造伝承にもとづく東方神聖方位観の反映

小括

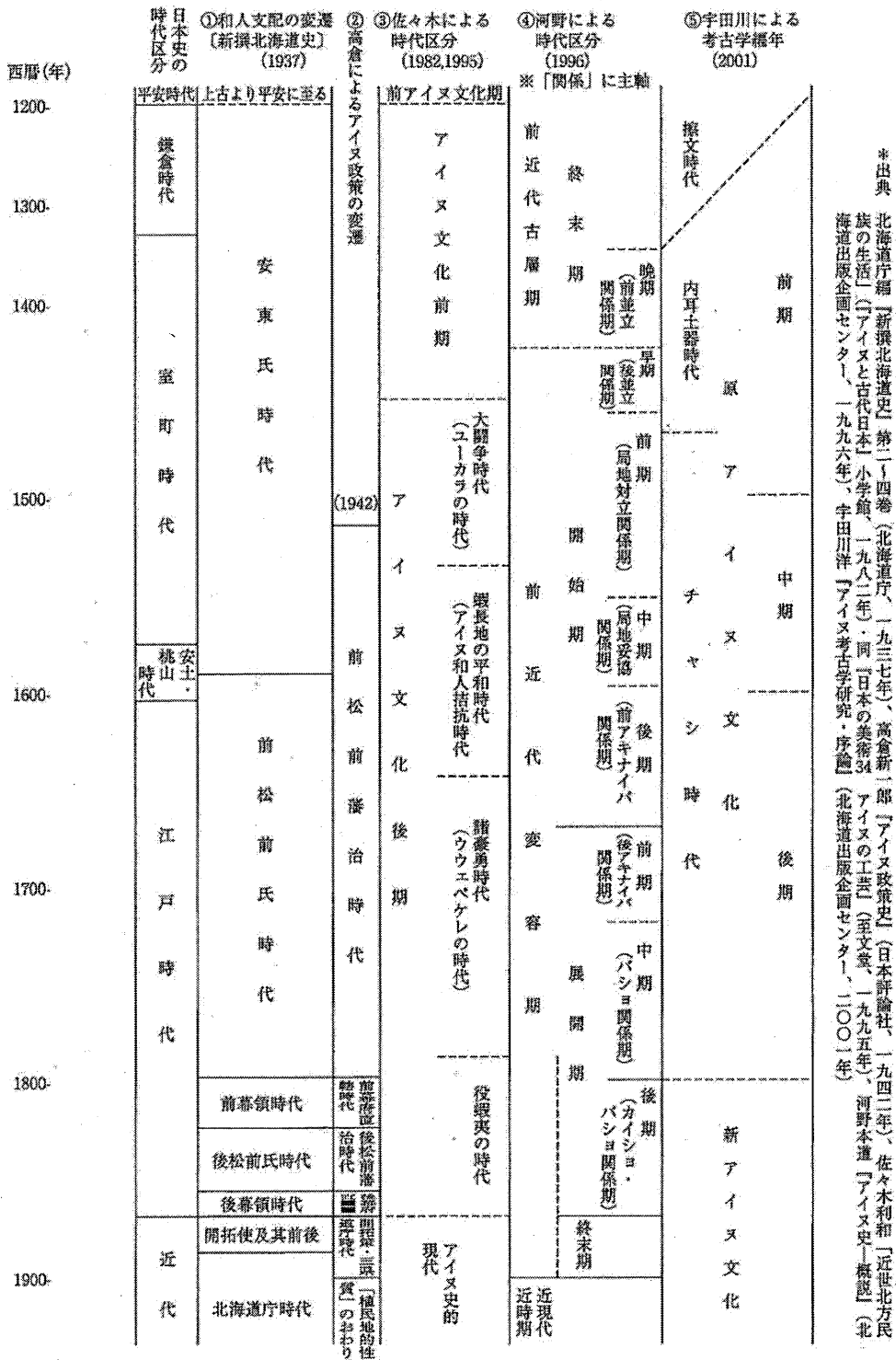


図1 「アイヌ史」の時代区分

谷本晃久 2004 「アイヌ史の可能性」『海外のアイヌ文化財：現状と歴史』

## 令和2年度（2020年度）第2回北海道史編さん委員会 次第

日 時 令和2年11月5日（木）14:00～

場 所 かでる2・7 1060会議室

## 1 開 会

## 2 議 事

- (1) 各部会・小部会の活動状況について
- (2) 『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について
- (3) 資料編の資料収録形態について
- (4) その他

## 3 閉 会

## 【配布資料】

- ・令和2年度（2020年度）第2回北海道史編さん委員会次第
- ・令和2年度（2020年度）第2回北海道史編さん委員会出席者名簿
- ・令和2年度（2020年度）第2回北海道史編さん委員会配席図
- ・道史編さん委員会組織図
- ・資料1 各部会・小部会の活動状況
- ・資料2 『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成案
- ・資料3 『北海道現代史』資料編収録要領
- ・資料4 資料編掲載サンプル
- ・資料5 道史編さん機関誌「北海道史への扉」第2号構成
- ・参考資料1 道史編さん大綱（平成30年4月1日施行）
- ・参考資料2 道史編さん計画（令和元年7月25日 北海道史編さん委員会承認）
- ・参考資料3 編さんスケジュール
- ・参考資料4 道史編さん機関誌「北海道史への扉」第1号

## 『北海道現代史』資料編収録要領

令和2年10月26日企画編集部会決定

## 1 趣旨

この要領は、『北海道現代史』資料編に各資料を収録するにあたって、必要な事項を定めるものである。原則として資料編各巻共通とするが、別に細則を必要とする場合は、各担当部会で検討したのち企画編集部会の了解を得て定める。

## 2 資料の編成と構成要素

## (1) 配列・解説の位置

資料は、章・節・項に編成し、その中で資料間の関連に留意しながら、原則として年代順に配列する。各章の最初に、担当者による資料の解説を付す。

## (2) 資料番号・表題

資料には通し番号を付し、編者が作成した資料の内容を示す表題を掲げる。

## (3) 年月日

「西暦（和暦）年」に続き、資料の年月日を表示する。原資料に記載されている場合はそのままとし、原資料に記載されていない場合は〔 〕内に推定年月日を記す。

出版物からの抽出記事の場合は、原則として当該出版物の発行年月日を記すが、記念誌・年史などから抽出した過去の事象であって、その事象の時期を特定できる場合はその年月日を、推定の場合は〔 〕内に年月日を記す。

上記の年月日は、資料情報の程度により、年月あるいは年までの表記にとどめる場合がある。

## (4) 出典

掲載資料の末尾に、出典を著編者・資料名の順に記す。資料が出版物の場合は表題を『 』で、公文書や企業資料など非出版物の場合は「 」で表記する。

## (5) 資料所蔵先

出典の次の行には、資料所蔵先を記す。複数の所蔵先が確認できる出版物等については、編集にあたって閲覧したところを資料所蔵先とする。ただし、市町村史や新聞、国会議事録など、所蔵先が広範にある出版物は資料所蔵先を省略する。

## (6) 資料の請求記号

資料所蔵先で、当該資料を特定するための請求記号（資料番号）を付与している場合は、資料所蔵先に続けてそれを記す。ただし、出版物である場合は記さない。

## 3 表記

## (1) 形式の変更

ア 原資料の形式を尊重するが、紙幅の都合や読みやすさへの配慮から、段落・改行・図表に最低限の変更を行うことができる。

イ 原資料が横書きのものは、原則として縦書きに改める。



ウ 原資料が英文のものは、邦訳し掲載する。

## (2) 読点・並列点・句点

資料を読みやすくするため、読点・並列点・句点を適宜補う。原資料に付された読点が文意を正確に表していない場合は、適宜、並列点・句点・小数点等に改める。

## (3) 文字の使用

ア 字体は、常用漢字のあるものは原則これに改める。置き換えるべき常用漢字のないものは、原資料の字体をそのまま用いる。

イ 人名の漢字は原資料のまま表記する。

ウ 仮名遣い・仮名の清濁・送り仮名・あて字は、原則として原資料のまま表記する。

エ 繰り返し記号は、原資料の表記にかかわらず、漢字の場合は「々」、平仮名の場合は「ゝ」「ゞ」、片仮名の場合は「ヽ」「ヅ」を用いる。二字以上の語句で「く」「ぐ」を使用している場合は、そのまま用いる。

オ 横書きを縦書きとするにあたっては、見出し番号等はそのままの表記とするが、文中のアラビア数字は漢数字に改める。また英文や学術記号など縦書きにそぐわない表記は、適当な形に改める。

カ 印章で、実際に押印されているものは、その形により㊦ ㊧ と表記する。

## (4) 判読不明文字・誤字・脱字

ア 虫損・破損・不鮮明で判読不能な文字は、字数の判るものは□、判らないものは [ ] で示す。

イ 明らかな誤字・誤植は、原文を示さずに訂正を施す。その他の誤字・誤植は、正しいと思われる文字を右傍に ( ) で示し、意味不明の場合は(ママ)(一カ)と記す。

ウ 脱字は推定して補い、右傍に(一脱)(一脱カ)と記す。

## (5) ふりがな、抹消・訂正、後筆、傍点等

ア 原資料にふりがながある場合は残し、原資料にふりがながない場合でも、必要と思われる語句には [ ] 内にふりがなを付す。

イ 抹消・訂正があるもので、これを残すことに意味がある場合は、抹消部分に消線を付し、訂正後の後筆を [ ] で表示し、その右肩に(後筆)と注記する。残すことに意味がないと考えられる場合は、修正後の文言をそのまま記す。

ウ 傍点(ゝゝゝゝ)、傍線(——)、圏点(○○○○)などは、原則として省く。

## (6) 省略

掲載上の都合で文章を省略した箇所は、〈中略〉と表記する。前略・後略は特に表記しない。

## 4 注記・その他

### (1) 注記

編者による補足が必要な場合は、 [ ] 内に注記する。

**(2) 個人情報**

個人名・住所等の個人情報で、掲載の趣旨から外れる場合は、人権やプライバシーへの配慮からこれを伏せる場合がある。その場合は、[人名]、[住所一部略]などと書き改める。

**(3) 差別的表現**

現在では差別的な用語や表現であっても、歴史的事実を正確に認識する意味から、そのままの形で掲載する。

**(4) 規定の追加**

この要領で定める事項以外にも、必要な事項が生じた場合は、別に定める。





## 道史編さん機関誌「北海道史への扉」第2号構成

(敬称略)

## 表紙／目次

- 1 論文／研究ノート (2,000字～20,000字)
- 坂下 明彦 (産業・経済部会 編さん委員)
  - 前田 亮介 (政治・行政部会 調査研究委員)
  - 大矢 一人 (教育小部会 調査研究委員)
  - 西田 秀子 (概説部会 編さん委員)
- 2 担当分野の構想 (2,000字～20,000字)
- 小川 正人 (共通 調査研究委員)
- 3 余録 (1頁=1,632字以内)
- 谷本 晃久 (概説部会 専門委員) 1頁
  - 佐藤 郁夫 (産業・経済部会 調査研究委員) 1頁
  - 林 美枝子 (社会・文化小部会 調査研究委員) 1頁
- 編さん室報告 4頁
- 委員名簿 4頁
- 編集後記 平野友彦 (「北海道史への扉」編集小部会長)・表紙写真解説
- 英文目次

計 36頁

(1及び2を1本あたり5頁平均として)

配信開始	2021年3月25日
------	------------